

現場とつながるオンライン高齢者介護施設実習の試み —学修成果と実習方略の関係—

石川 りみ子¹⁾・江口 恭子²⁾・石津 仁奈子²⁾

要旨

オンラインで現場に近いコンテンツを用い、実習方略を工夫し高齢者介護施設実習（老年看護学実習）を行った結果、臨地実習に近い目標達成ができたことが示唆された。その有効性にかかわる要素は次のとおりである。1. 施設内での高齢者の生活や活動とそれを支える専門職の介護・看護場面を切り取った動画は、施設に入所する高齢者の理解や尊厳とその人らしさをふまえた支援および施設内看護の理解に繋がった。2. 入所中の一人の高齢者をグループ全員が受け持ち、個人ワークと討議を組み合わせて高齢者像を捉え、さらに受け持ち高齢者とコミュニケーションを行ったことは臨場感のある高齢者理解に繋がった。3. レクチャーの聴講および実習指導者を交えた討議は、施設における看護・介護の専門性や多職種連携の理解に繋がった。4. 動画視聴後、レクチャー聴講後の学生間および教員との頻回な討議は、思考する能力を涵養し、多角的な視点と深い学びに繋がった。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、高齢者介護施設、老年看護学実習、オンライン

An Effort of Online Practical Training to Connect with Long-Term Care Facilities for Elderly —Relation Between Learning Outcomes and Strategy of Practical Training—

Ishikawa Rimiko¹⁾, Eguchi Kyoko²⁾, Ishizu Ninako²⁾

Key Words : covid-19, long-term care facilities for elderly, gerontological nursing of practical training, online training

I. はじめに

全国的な新型コロナウイルス感染症（以下 Covid-19）拡大に伴い、A 大学は 2020 年度 4 月開講科目を 5 月開講に延期するとともに、全授業科目がオンライン授業に切り替わった。それに伴って、看護学部も 2020 年 2 月の文部科学省と厚生労働省が連名で出した「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」文部科学省厚生労働省（2020）を受け、実習施設確保が困難なこと、学生の安全確保・感染予防の観点から、

2020 年度前期の全ての看護学実習はオンラインで実施するということが決定された。それに基づき老年看護学分野においてもビデオ会議システムを用いたオンライン実習を実施することになった。しかし、A 大学看護学部は 2017 年に開設されたため、当該実習である老年看護学実習（高齢者介護施設実習）は実習施設にとって初めての実習受け入れであったことに加え、これまで看護学生の実習を受け入れた経験が皆無に近かった。このような厳しい条件のもと、臨地実習の看護実践に必要な基礎的能力を修得するという目標（山下暢子

1) 清泉女学院大学看護学部

2) 秀明大学看護学部

ら、2018)を達成するには現場に近い臨場感ある企画が必要で、そのためには準備段階から実施まで実習施設と協力体制を緊密に敷くことは不可欠であった。そこで、実習方法はオンラインでリアルタイムによる双方向の実習を組み立てること、すなわち、ビデオ会議システムを用いてリアルタイムにコンテンツを配信し、ビデオ通話で討議しながら学修を進めるという方法を用いることにし、実習目標に沿ったコンテンツの作成を実習施設に協力依頼することにした。実習に使用するコンテンツは、老年看護学分野内で検討した結果、実際に実習を行ったときに体験するような施設の日常の様子やケアの状況を映し出す動画、学生の受け持ちとなる入所中の認知症高齢者情報、ビデオ通話による受け持ち高齢者とのコミュニケーション場面、実習指導者および看護師のレクチャーと討議、および実習で日頃行っている学生カンファレンス等であった。そこで、日頃から高齢者体験スーツの貸与や大学祭での老年看護学分野とのコラボによる企画等で交流があった一実習施設に先述の、動画撮影や受け持ち高齢者の情報提供、コミュニケーション場面の設定と補助、レクチャー等を依頼し、実習施設と綿密な打ち合わせを行い、準備から実際の指導を施設と協働し行った。当該実習施設は、コロナ感染対策の一環として外部からの入館は厳禁で実習受け入れは困難であったことから、この企画に対し準備状態からオンライン実習での参加には前向きであった。その結果、このようなコロナ禍にあってもビデオ会議システムを活用し、実習施設と臨場感ある実習方略の工夫をすることによって臨地実習に近い目標達成ができたのではないかと考える。

そこで、オンライン実習の実習方略の工夫と学修成果との関係を明らかにすることは、緊急状況下においても臨地実習のねらいを補完する方略の一助になると考える。

II. 研究目的

オンラインによる老年看護学実習の実習方略の工夫と学修成果との関係を明らかにし、学修成果につながるオンライン実習の要素を探る。

III. 老年看護学実習（高齢者介護施設実習）の概要

本研究は、学生を対象としインタビュー調査とアンケート調査を行った。両調査は目的が違うことと、インタビュー調査はすでに掲載（江口ら、2023）済みであるため、今回はアンケート調査に焦点をあてて報告する。実習概要は同様であるため一部はそこからの引用である。

1. 実習目的・目標と学生のレディネス

実習目的は、障害を抱えながら地域で生活する高齢者とその家族の特性を理解し、地域の保健・医療・福祉サービス機関と連携しながら、高齢者が地域で生活し続けるための継続看護を実践するための能力と態度を養うと掲げ、4年生前期に2週間実施する2単位の必修科目である。実習目標は、1. 介護老人保健施設等で生活する療養者を全人的に理解し、その人らしさを尊重した施設における看護の機能と役割を考えることができる、2. 認知症など生活機能障害のある高齢者とその家族を全人的に理解し、尊厳ある態度で接することができる、3. 施設および地域における保健・医療・福祉の連携および社会資源の活用を理解し、高齢者が地域で生活し続けるための支援について考えることができる、の3つである。その実習目標に対して設定した具体的到達目標には実践力を求める「対象の気持ちを尊重し、快を与える生活援助を計画し実施・評価できる」「生活の中でその人らしさが生かされるよう対象の強みを活かした支援ができる」等が含まれる。受講した4年生33名は、3年次後期に老年看護学実習を病院で高齢患者を受け持ち、看護過程を展開する2週間2単位の実習を修了している。

オンライン実習になったことから、どのような

点を変更すべきか老年看護学分野内で検討を行った。その結果、実習目的・目標は現行のままで達成可能であるが、一方、到達目標は、オンラインの特性上、実践的な内容は達成することが難しいことから、「計画・実施・評価」に関することは「計画できる」「考えることができる」とし、思考を重視するものに変更した。

2. オンライン実習に用いたツールと方法

1) Zoom Meetings (以下, Zoom)

Zoom 社が提供するビデオ会議システム (Zoom 社ホームページ, 2022) は、初日オリエンテーション、動画視聴と討議、カンファレンス・報告会、実習指導者によるレクチャー、受け持ち高齢者とのコミュニケーションに使用した。

2) Google Classroom (以下, GCR)

Google 社が提供する教育機関向け Web サービス (Classroom の概要, 2022) はオンライン上でメッセージの送受信、資料配布、課題の配信、提出、採点、返却を行うことができる。また、ビデオ会議ツール (Google Meet ; 以下, Meet) や、ドキュメント作成ソフト (Google Document ; 以下, Document), プレゼンテーションソフト (Google Slide ; 以下, Slide) が連動しており、GCR のメンバーとなっている教員・学生とでファイルの共有や、共同編集が可能である。朝の出席確認、資料配布、諸連絡、記録物・レポートの提出および最終報告会で使用した。また、一部のカンファレンスでは Zoom に代わって Meet を使用した。

3. 実習施設との協働による事前準備

2020 年 4 月、実習が全面的にオンラインになることが決定された際、直ちに実習施設に協力を依頼した。感染予防の観点から施設に立ち入ることが出来ないため、Zoom を用いて実習指導者と打ち合わせを重ねて実習内容を検討し、受け持ち高齢者情報の提供、施設構造やケア場面・デイサービスの動画撮影、実習指導者・専門職によるレクチャーとカンファレンスへの参加について協力

を得た。受け持ち高齢者は現在、実習施設に入所中で認知症の診断を受けた 65 歳以上の高齢者を実習指導者が選定した。高齢者および家族には実習指導者が実習のために情報を提供することと学生とビデオ通話を行うことを説明し同意を得た。学生に対しては、通信状況を確認するとともに、可能な限りパーソナルコンピューターを準備し、一日数時間のビデオ通話が可能な通信環境を整えるよう伝えた。また、実習開始までに GCR から実習要項、実習スケジュール、実習記録用紙等の資料と事前学習課題を配信した。受け持ち高齢者のプライバシー保護の観点から受け持ち高齢者の氏名はメールや GCR、実習記録等に一切記載せず口頭で伝えるのみとし、学生には個人情報保護に関する誓約書の提出を義務づけた。

4. オンライン老年看護学実習の展開

学生は 3~4 名のグループで 1 名の認知症高齢者を受け持ち、看護過程を展開した。学生は、受け持ち高齢者に関しては施設から生活史を含めた日常生活情報の提供を受け、看護問題抽出のアセスメントを行った。また、施設内の日常生活状況を把握するため、ケア場面等の動画を視聴し討議を行なった。加えて、一週目には認知症高齢者と介護福祉士とのコミュニケーション場面の動画を視聴してプロセスレコードを作成し認知症高齢者とのかかわり方の分析を行った。二週目には受け持ち高齢者像を各々がまとめ、発表・討議し各自高齢者像の修正を行った。さらに認知症高齢者を深く理解するために、Zoom でコミュニケーションを行った。コミュニケーションはグループメンバー全員と受け持ち高齢者が 15 分程度会話をした。コミュニケーション前日には、進め方も含めて学生が主体的に考え、互いに受け持ち高齢者を演じて練習をした。実習指導者が参加するカンファレンスでは、高齢者像をまとめていく過程で学生が必要と思った情報および動画を視聴し疑問に思ったことや確認したいことを質問できるよう時間を設けた。また、プロセスレコードの場面で認

知症高齢者と実際に関わっていた職員から、その場面でどういうことを考えて関わっていたのか、対象の言動をどう捉えていたのかななどを Zoom 越しに説明してもらうこともあった。一日の流れとして、学生は GCR から実習開始前に日々の行動計画、実習終了時はその日の実施と考察、学びの記録用紙を提出し、日々教員がコメントを入れて返却した。実習最終日は実習指導者を交えて合同報告会を行った。報告会後には個別面接を行い、目標達成度を確認した。Zoom を使用しない時間は個人ワーク (Personal Works ; 以下、PW とする) とし、学生各々が理解を深めるための主体的学修に取り組んだ。

なお、実習目標に沿った実習のコンテンツは以下のとおりである。

目標 1 介護老人保健施設等で生活する療養者を全人的に理解し、その人らしさを尊重した施設における看護の機能と役割を考えることができる。

- (1) GCR から配信された受け持ち高齢者の①基本情報、②生活状況のデータベースを個別に熟読し (PW)、その後とらえた高齢者像を学生間で話し合う (Group Works ; 以下、GW とする)。
- (2) 個別に行ったアセスメント (PW) を、グループ内で発表、討議し (GW)、不足情報を追加する。
- (3) アセスメントをとおして高齢者の生活史、価値観、生きがい、生活習慣、日常生活動作や、支援内容をとらえる。
- (4) 高齢者の背景をふまえて Zoom でのコミュニケーションを行い、高齢者像を実体化する。
- (5) Zoom でのコミュニケーション場面ではその人らしさを尊重した態度で接する。
- (6) 学生は看護師によるレクチャー「施設における看護の機能と役割」の録画視聴と看護師との質疑応答を行う。また、看護師の支

援の動画視聴；食事介助、創傷処置、バイタルサイン測定等と視聴後のグループ討議を行う (GW)。

目標 2 認知症など生活機能障害のある高齢者とその家族を全人的に理解し、尊厳ある態度で接することができる。

- (1) 認知症高齢者と介護福祉士とのコミュニケーション場面の動画を視聴し、プロセスレコードを各自作成し分析・考察を行う (PW)。その後グループ内で発表、意見交換を行う (GW)。さらに、実習指導者参加のもと修正したプロセスレコードを発表し、質疑応答を行い、コメントをもらう (2～3G 合同発表)。
- (2) 認知症高齢者の日常生活支援場面や体操、工作などのアクティビティの動画視聴と討議を行う (GW)。

目標 3 施設および地域における保健・医療・福祉の連携および社会資源の活用を理解し、高齢者が地域で生活し続けるための支援について考えることができる。

- (1) 生活指導員・ケアマネジャーによるレクチャー「家族の介護問題と社会資源の活用」を聴講し質疑応答を行う (2～3G 合同討議)。
- (2) サービス担当者会議 (多職種合同カンファレンス) とデイサービスの動画を視聴し、視聴後の討議を行う (GW)。

IV. 研究方法

1. 調査期間

2021 年 1 月から 3 月 31 日

2. 調査方法

老年看護学実習 (高齢者介護施設実習) を履修した看護学生 (4 年生全員 33 名) に自記式アンケート用紙を一斉に配布し協力を依頼した。調査内容は老年看護学への興味、実習目標の達成度とオンライン実習方略からの学び、実習コンテンツ

からの学び，オンライン実習ならではの学び等である．対象学生に対し，口頭および文書で調査を依頼し，同意する学生にはアンケート用紙を郵送するよう依頼した．回収したアンケート用紙は情報の漏洩を防ぐため鍵付き保管庫で保管した．分析は，データの集計と割合を算出し学習の達成度を推し量る，自由記載に関しては目標ごとに意味内容を分類し実習コンテンツと学修内容との関係をデータの割合とを合わせて分析し，考察した．

3. 倫理的配慮

研究参加にあたっては，参加しなくても不利益を被らないために当該科目の成績が確定した後に依頼し，自由意思の尊重，個人情報保護，データの匿名化，データは目的外に使用しないこと，結果は公表することを説明した．アンケートの投函をもって研究参加の同意とした．

なお，本研究は，秀明大学の研究倫理審査委員会の承認を得ている．（秀明大学研究倫理委員会承認番号 20E001A）．利益相反はない．

V. 結果

アンケート調査に回答した学生は7人（回収率 21.2%）であった．以下，質問に沿った回答結果である．

1. 老年看護学への興味と目標達成

老年看護学への興味は，実習前は2人（28.6%）が「どちらかという興味がない」と回答していたが，実習後は全員が「興味がある」，「どちらかという興味がある」と回答していた．また，実習後興味がある方への変化があった者は4人（57.1%）であった．

実習目標については，目標1および目標2は「達成できた」，「まあまあ達成できた」と回答し全員が達成できていた．目標3は全員が「まあまあ達成できた」と回答し，目標1～3については全員が達成していた．

2. オンライン実習のコンテンツ，オリジナル動画

(1) 高齢者介護施設内の動画は施設理解に役立ったとする回答は「とても思う」が5人（71.4%）「まあまあ思う」が2人（28.6%）と全員が役立ったと回答した．

(2) スタッフの認知症高齢者へのかかわりの動画視聴とプロセスレコード作成は認知症高齢者とかかわりの理解に役立ったとする回答は「とても思う」が4人（57.1%），「まあまあ思う」が3人（42.9%）と全員が役立ったと回答した．

(3) 施設内の生活援助場面の学びは6名（85.7%）が「とても思う」，「まあまあ思う」と回答していたが，1人（14.3%）は「あまり思わない」と回答していた．生活援助で学びの大きかった項目は「おやつの援助」と「トイレ誘導」が各6人（85.7%）で最も多かった．

(4) 高齢者の意思表示へのかかわりの学びについて「とても思う」が4人（57.1%），「まあまあ思う」が2人（28.6%）であったが，1人（14.3%）はあまり思わないと回答していた．意思表示の学びの場面は「トイレ誘導」が6人（85.7%）と最も多く，次いで「おやつの準備」と「おやつの援助」が各4人（57.1%），「整容動作」3人（42.9%）であった．高齢者の意思表示の学びの「とても思う」と回答した者はおやつの準備と援助場面であった．

(5) 高齢者の尊厳の学びについて「とても思う」と回答した人は5人（71.4%）と最も多く，「まあまあ思う」の1人（14.3%）を加えるとほとんどが学んでいたが，「あまり思わない」と回答した人も1人（14.3%）いた．尊厳について印象的だった場面は「トイレ誘導の際スタッフと通じる言葉を決めトイレであることを周囲に知られないようにする配慮がされていた」，「敬語を用い，その人の性格や生活背景を把握していた」，「目線をなごませて関わっていた」，「介護士とのかかわりの場面での否定しない声掛け，認知症の方が昔の話や現在のことのように話していても（牛の乳しぼりの仕事をするために帰りたいと話するなど），

話を合わせて尊厳を守りつつ、現実ともかけ離れないように会話をしていた」、「介護士の言葉選び」が挙がっていた。

(6) 多職種合同カンファレンスでの多職種協働の学びは「とても思う」2人(28.6%)、「まあまあ思う」は3人(42.9%)が回答していたが、「あまり思わない」は2人(28.6%)が回答していた。

(7) デイサービス、アクティビティからの学びでは「とても思う」は2人(28.6%)、「まあまあ思う」は4人(57.1%)とほとんどが学んでいたが1人(14.3%)は「あまり思わない」と回答していた。学んだ内容としては、「デイサービスの様子」、「一人ひとりの状態を把握してその人に合った対応をしていた」、「BGM をかけた環境づくり」、「次に何をしたいか質問し意思表示を促したり、高齢者にとって刺激になる音、テーブルの色や設置の仕方などの環境を整えることも大切だということ」、「全体的に高齢者の言動に感謝をしたり称賛したりしてそれによって自分は認められている存在だと意識づけることに繋がることを学んだ」と回答していた。

(8) 看護師の機能と役割の理解について、レクチャーによる録画には「とても思う」と回答した人は3人(42.9%)、「まあまあ思う」4人(57.1%)と全員が理解できたと回答していた。

その場面は創傷ケアと食事拒否の高齢者の食事介助場面が5人(71.4%)ずつで、嚥下困難の食事介助3人(42.9%)、バイタルサイン測定が2人(28.6%)であった。

3. 高齢者との Zoom でのコミュニケーション

高齢者とのコミュニケーションは、コミュニケーションがうまくいったと回答した人は「まあまあ思う」が5人で、「あまり思わない」は2人(28.6%)が回答していた。コミュニケーションが高齢者像のアセスメントに役立ったかについては「とても思う」が1人(14.3%)、「まあまあ思う」と回答した人は6人(85.7%)と全員が役立

ったと回答していた。

4. 動画視聴後の振り返りとオンラインでの討議

振り返りと討議が理解に役立ったとする場面については、プロセスレコードが5人(71.4%)と最も多く、次いで実習指導者との意見交換、看護師との質疑応答、生活援助が各4人(57.1%)であった。

5. 「家族の介護問題と社会資源の活用」のレクチャー

「とても思う」が2人(28.6%)、「まあまあ思う」4人(57.1%)が学んだと回答していたが、1人(14.3%)は「あまり思わない」と回答していた。具体的な学びの内容は、「施設に入れる順番」、「待機人数」、「実際の状況」、「息子が精神疾患かつ生活保護を受けていた方で、限られた資金の中でもよりよい療養ができるよう多職種で知恵を出し合っていたこと」、「社会資源を活用しながら仕事を続けている事例」であった。学びのなかで特に印象に残ったことは、『『お金がある＝質の良い看護・介護』ではなくいかに相手を思っているかが大切だということ』、「障害があってもフォーマルな資源とインフォーマルな資源を利用することで仕事が継続できその人らしい生活を送ることができること」と回答していた。

6. オンライン老年看護学実習を実施して学んだ点、よかった点

実習で学んだ点は、「グループメンバーで同じ対象者を持つことで自分だけの視点ではなく他者からの視点で考えることができるため学びがとて多かったこと」、「施設における療養者のその人らしさを尊重するスタッフの援助を見学し、看護師としての援助方法を学ぶことができたこと」、「高齢者の方とコミュニケーションが取れてよかった」、「認知症高齢者の方とのかかわり方、接し方について学んだこと」、「否定しない、高齢者の世界に自分も入り込む、名前を呼ぶことや感謝を伝えられることで存在を認識してもらうことなどが大切であると学んだ」、「介護士・看護師の視点

からも関わるうえでの留意点を学ぶことができ、施設で求められる看護師の役割を認識することができた」、「動画を視聴したり実際に現場で働いている方の話を聞くことができたことでより理解を深めることができた」、「具体的なプロセスレコードを作成できた」等であった。

7. オンライン実習だからこそ学べたこと、改善点

オンライン実習から学んだこととして、「コンピューターの操作方法」、「意見を言いやすかった」、「ナイトケアでの場面など様々なシーンを（録画で繰り返し）見ることができ、高齢者との実際のかかわり方をおして知ることができた」、「パソコンとにらめっこになったが考える時間が多かった」、「じっくり考えることやグループとの話し合いも多くあり、深く考えることができたと思う」、「生徒間、先生とのカンファレンスの時間を多く確保することができたことによって自分では気が付かなかった学びを共有できた」、「移動時間がないことでその分看護計画など考えることに頭を使う時間が持てた」、「（臨地）実習だとなかなか看護過程を共有しそれに対して自分はどう解釈してそういうアセスメントをしたかということを対象者が違うこともあり濃い意見交換は難しいが、遠隔であり事例が同じであるからこそ、濃い話し合いができた」、「グループ全員が一人の対象者を受け持つことにより様々な意見や考えを知ることができた」、「他のメンバーのアセスメントを聞くことができ学びや考え方を深めることができた」、「家にいる祖父母を重ね合わせながら実習に取りくめた」等であった。ほか、「他の遠隔実習や授業と比較して実習施設や先生方の協力は多大であったため、より臨地実習に近い学びを得ることができたし、適度な緊張感もあった」との記載もあった。

改善・検討が必要な点については、「動画の画質や通信がうまくいかないときはすごく不安だったし、うまく理解できなかった」、「グループでの

話し合いの頻度が多かった」、が挙げられた。また、「半年前のことで思い出せない」もあった。

VI. 考察

1. オンライン老年看護学実習のコンテンツと実習方略の有効性

アンケート調査の学生の反応から、コンテンツと実習方略の有効性と課題を考察する。

実習をとおして老年看護学への興味が全員持てるようになったこと、実習目標が達成できたことはオンラインでも実習のねらいがある程度果たせたと言える。前述の実習目標 1. 2 はその人らしさをキーワードとする認知症高齢者を含めた対象理解と尊厳ある態度の理解、施設内の看護の機能と役割の理解である。高齢者が生活する施設内環境理解については全員が理解したとしており、高齢者にとって刺激になる音やデイサービス・アクティビティでの工作・体操での BGM を流した環境づくり、テーブルの色や設置の仕方など施設内環境の理解と生活援助をとおした環境を理解していた。学生が生活援助で学びが大きいとした「おやつへの援助」と「トイレ誘導」は本人の意思表示を介護士が尊重する場面の動画である。また、高齢者の尊厳については、動画のトイレ誘導の際周囲に気づかれないように合言葉を使って誘う動作や敬語を用い視線をなごませて関わる生活援助場面などから学んでいる。その人らしさを尊重した看護については、認知症高齢者との関わりの動画視聴とその後の討議によってその人の性格や生活背景を把握したり、否定しない声掛けや昔の話を現在のことにように話す場面（牛の乳しぼりの仕事をするために帰りたいと話すなど）で職員が話を合わせて尊厳を守りつつ現実ともかけ離れないように会話をしていたとして認知症高齢者の理解とともに尊厳ある態度の理解ができていた。そのことは、実際その場面で関わっていた職員のかかわりの意図を学生に伝える機会を設けたことも影響していると考えられる。桂ら（2008）は実習をと

おして認知症高齢者に直接接する過程の中で尊厳性に対する肯定感が高まった可能性を示唆している。また、高齢者の世界に自分も入り込む、名前を呼ぶことや感謝を伝えることで存在を認識してもらうことなどが大切であるという学びも、尊厳の態度の学びとして捉えることができる。しかし、尊厳の学びの動画について「とても思う」と回答した人は5人「まあまあ思う」1人を加えると85.7%となりほとんどの学生がよく学んでいたが、一人(14.3%)から「あまり思わない」との回答があったことから、さらなる動画の工夫と討議による気づきの広がりが求められた。

施設における看護と機能の役割の理解については、レクチャーによる録画には全員が理解できたと回答していた。具体的な場面では、創傷ケアと専門知識が必要な食事介助場面が理解に役だったとの回答が多かったことから、実際の施設内での看護ケアの場面を切り取った動画視聴は有効であったと考える。また、「施設内の療養者のその人らしさを尊重するスタッフの援助を見学し、看護師としての援助方法を学ぶことができた」や「認知症高齢者の方とのかかわり方、接し方について学んだ」、「実際に現場で働いているスタッフの話を知ることができた」などは「看護師の機能と役割」のレクチャーやケア場面の動画視聴、実習指導者、ケアする職員との質疑応答、コメントから得られたものである。そのような現場で行われている具体的なケア場面の動画や専門職との質疑応答などが学びに功を奏したと考える。また、「介護士・看護師の視点からも関わる上での留意点を学ぶことができ、施設で求められる看護師の役割を認識することができた」との記載は、多職種が協働して働く施設における看護(石垣範子ら, 2015)の学びであり、それらをとおして、施設で求められる看護師の機能と役割を学んでいるといえる。

目標3については全員がまあまあ達成したと回答していたが、多職種合同カンファレンスでの多職種協

働の学びは2人(28.6%)が、「家族の介護問題と社会資源の活用」のレクチャーについては1人(14.3%)が「あまり思わない」と回答していた。しかし、具体的事例では福祉と社会資源の活用がその人らしい生活を送ることができることの理解につながっておりレクチャーはある程度有効であったと考える。

次に、オンライン実習の方略について考察する。

オンライン実習では、学生それぞれが自宅においてリアルタイムで大学から配信された患者情報を各々がまとめアセスメントし、それをZoom画面で発表・討議するという企画であった。看護過程における対象者情報のアセスメントでは「グループメンバーで同じ対象者を持つことで自分だけの視点ではなく他者からの視点で考えることができるため学びがとても多かった」や「他のメンバーの(患者情報の)アセスメントを聞くことができ学びや考え方を深めることができた」とあり、それはすなわち、一人の高齢者をグループで受け持つが、各自でアセスメントを行い、それをグループ討議をとおして、高齢者像を様々な角度から吟味し捉えなおしたことによって対象理解が深まったのではないかと考える。さらに、「実習だと・・・対象者が違うこともあり濃い意見交換は難しいが、遠隔であり(実習では)事例が同じであるからこそ、濃い話し合いができた」や「グループ全員が一人の対象者を受け持つことにより様々な意見や考えを知ることができた」とあり、臨地実習ではみられなかった学修成果といえる。その結果は、インタビュー調査のカテゴリー分析【動画視聴と討議を重ねることによる学びの深化と満足感】や【討議を重ねる事による学びの深化】(江口ら, 2023)の報告とも一致する。これらは動画の繰り返し視聴と、学生間や教員とのカンファレンスの時間を多く確保したこと、実際に現場のスタッフの話を知ったことから学びが共有され、より理解の深化に繋がったと考える。また、対象者の理解は、Zoomではあったが、受け持ち

高齢者と直接コミュニケーションをとったこともリアルな体験になりグループでの高齢者像の理解と共有化に役立ったことが推察された。

2. オンライン実習の有効性と課題

老年看護学実習は、ビデオ会議システムとWeb サービスを併用し行った。実習は開始とともに実習メンバーがモニター画面を通して一堂に会し、当日の流れを共有することから始まった。

オンライン実習ならではの学びは、まず、コンピューターの操作方法が修得できたことである。オンライン実習では意見が言いやすかったとあったが、臨地実習では日常の環境が変わることによる環境適応の大変さに加え、実習指導者との関係性からくる緊張感(山下ら,2018)が生じる。オンライン実習では自宅から画面をとおして討議や発表が行われたことが意見の言いやすさにつながり、それは討議の活発さや積極的な学修態度に繋がったと推察された。インタビュー調査の【オンライン実習による主体的な学習態度の涵養】(江口ら, 2023)の一端を担ったものと考えられる。また、意見の言いやすさはグループ内で自由に意見が言える雰囲気存在を意味し、藤野(2005)のグループワークの満足との関係で相関の高いのは【メンバー間の協調性】であるという報告から、これらの討議による成果はメンバー間の協調性を涵養することにも役立ったことが示唆された。オンライン実習は「一日中パソコンに向き合う」、「考える時間が多かった」、「移動時間もないことから看護計画など思考にかけられる時間が多くあった」とあり、十分に時間をかけ思考したことが学びの深化に繋がったといえる。山下ら(2018)は臨地実習では看護過程の展開や学修成果の記述に時間を要し、自己学習時間を取れないという問題を指摘している。オンライン実習では移動時間も学修時間や思考する時間に充てることができ、学生の思考を涵養するこの方法は有効であったと考える。また、自宅からオンラインで実習場面につながるこの方法は、家にいる祖父母と重ね合わせながら

実習にとりくめたともあり、過度の緊張を解きほぐすとともに、身近な存在が現実的な学びに役立っていた。「臨地実習に近い学びを得ることができたし、適度な緊張感もあった」との声はオンライン実習であってもより実習現場に近いコンテンツを用意し、思考を刺激する討議や発表、課題提出などをうまく組み合わせることによって、実践的技術修得を除いて実習目標は臨地実習に近い程度に達成できると考える。今後は、実践的技術修得も得られるよう、シミュレーション教育も活用し実習方略を工夫することが課題である。

改善・検討が必要な点については、動画の画質や通信がうまくいかないときはすごく不安だったし、うまく理解できなかったという声も挙がった。オンライン実習の課題は通信環境の脆弱さである。学生、大学双方の通信環境を整えることが前提の課題といえる。また、グループでの話し合いの頻度が多かったとの声もあったことから、通信環境への影響や学生の疲労感も併せて適切な組み立てを考えることが求められた。

研究の限界として、本研究はアンケート回収率が21.2%と少なかったことから、学生全体の結果とはいえない。しかし、参加した学生の回答結果は前向きな回答であったことやそれ裏付ける自由記述も得られたことから、それを活かした評価は可能と考える。回収率の低さはCovid-19感染拡大の渦中にあり、卒業直前に調査したことも一要因と考えられたため、調査の時期を検討する必要性が求められた。

Ⅶ. 結論

オンラインで現場に近いコンテンツを用い、実習方略を工夫し高齢者介護施設実習を行った結果、7人(21.2%)の分析結果から臨地実習に近い目標達成ができたことが示唆された。その有効性にかかわる要素は以下のとおりである。

1. 施設内での高齢者の生活や活動とそれを支える専門職の介護・看護場面を切り取った動画は、

施設に入所する高齢者の理解や尊厳とその人らしさをふまえた支援および施設内看護の理解に繋がった。

2. 入所中の一人の高齢者をグループ全員が受け持ち、個人ワークと討議を組み合わせて高齢者像を捉え、さらに受け持ち高齢者とコミュニケーションを行ったことは臨場感のある高齢者理解に繋がった。

3. レクチャーの聴講および実習指導者を交えた討議は、施設における看護・介護の専門性や多職種連携の理解に繋がった。

4. 動画視聴後、レクチャー聴講後の学生間および教員との頻回な討議は、思考する能力を涵養し、多角的な視点と深い学びに繋がった。

謝辞

本研究の実習準備から実習指導までの一貫した協力をいただいた特別養護老人ホームはなみずきの施設長をはじめスタッフの皆様、およびアンケートに協力いただいた学生の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

Classroom の概要

https://support.google.com/edu/classroom/answer/6020279?hl=ja&ref_topic=10298088
(2022年9月24日閲覧)

江口恭子,石津仁奈子,石川りみ子(2023).現場とつながるオンライン高齢者施設実習の成果と現状～学生の学修成果と課題～.秀明大学看護学部紀要,5(1),pp27-35.

藤野ユリ子(2005).看護学生がグループワークで感じる困難と満足との関係.日本看護学教育学会誌,15(1), pp1-13.

石垣範子,深江久代(2015).臨地実習指導者の語りをとおした老年看護についての一考察.福岡県立大学短期大学部研究紀要, 29, pp57-68.

桂晶子,佐藤このみ(2008).看護大学生が抱く認知

症高齢者のイメージ.宮城大学看護学部紀要,11(1),pp49-56.

文部科学省 厚生労働省(2020.2.28):新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校,養成所及び養成施設等の対応について<https://www.mext.go.jp/content/202000302-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf>

山下暢子,舟島なおみ,中山登志子(2018).看護学実習中の学生が直面する問題－学生の能動的学習の支援に向けて－.看護教育学研究,27(1), pp51-65.

Zoom 社ホームページ

<https://explore.zoom.us/ja/products/meetings/>
(2022年9月24日閲覧)